

「ビザンティン三部作」をめぐって

—古典学と神学のあわい—

秋山学

序. 「ビザンティン三部作」とは

ギリシア悲劇およびギリシア喜劇の4人の詩人たち（アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス、それにアリストファネス）については、それぞれ「ビザンティン三部作」と呼ばれる作品の群れを取り出すことができる。すなわち、アイスキュロスの「ビザンティン三部作」とは『縛られたプロメテウス』『テバイ攻めの七将』『ペルサイ』である。ソフォクレスにも「ビザンティン三部作」があり、それは『アイアス』『エレクトラ』『オイディプス王』である。そしてエウリピデスの「ビザンティン三部作」とは、『ヘカベ』『オレステス』『フェニキアの女たち』である。一方喜劇詩人アリストファネスの「ビザンティン三部作」と呼ばれる作品は、『福の神』『雲』『蛙』である。

つまり「ビザンティン三部作」という呼称は、原著者たちの意図とは関係なく、純粋にビザンティン時代の傾向として、上掲したような形で各詩人の作品が好まれ、写本が量産されて、後世にも明瞭な形で当時の写本筆写状況が記憶されることになった、という次第を指す表現である。これら「三部作」と呼ばれるものに関しては、各詩人の作品群に関してその筆写順も定まっており、それは上掲した順序に定着している。これら各詩人の「三

部作」を収めた写本が数的に増大するのは 14 世紀とされるが、上掲の作品群が好まれる傾向はそれ以前から見られ、それは早ければ 10~11 世紀頃、本格的には 13~14 世紀頃を指すと言って差し支えないだろう。もとよりメリディエによれば、おそらくハドリアヌス帝（在位 117-138）時代の無名の人物が、時代の趣向に合わせるため、3 悲劇詩人に関して作品選集を編んだとされる（Mérider 1956:xx）。こうして選ばれたのが、アイスキュロスとソフォクレスについてはそれぞれ現存する 7 編、エウリピデスについては『ヘカベ』『オレステス』『フェニキアの女たち』『ヒポリュトス』『メデア』『アルケステス』『アンドロマケ』『レソス』『トロイアの女たち』『バックイ』の順に計 10 編であった。エウリピデスの場合、この 10 編のうち最初の 3 作が「ビザンティン三部作」の順に並んでいる。また、アイスキュロスとソフォクレスの現存作品を収めた 11 世紀の良質写本（アイスキュロスの M、ソフォクレスの L）にあって、ソフォクレスの収録順は『アイアス』『エレクトラ』『オイディプス王』『アンティゴネ』『トラキスの女たち』『フィロクテテス』『コロノスのオイディプス』であるから、やはりこの冒頭 3 作は「ビザンティン三部作」に等しい。したがって、「ビザンティン三部作」の順序が、特にビザンティン時代に発案されたということではない（なおアイスキュロスに関して、同じ M 写本での 7 編の順序は「ビザンティン三部作」のものとは一致しない。フンガーによれば、M のステンマと「ビザンティン三部作」タイプの Φ のステンマとは、アーキタイプ ω で初めて交わる。Hunger 1961:274、cf. Turyn 1943:16; この次第については後述）。

14 世紀後半にまで下った頃に生まれる写本、つまり明瞭に「ビザンティン三部作」という形で各詩人の作品を収める手写本については、その質は高くないとされる。ただ、このように「ビザンティン三部作」が量産される時期を先導する形で、当時のビザンティン世界、すなわちパライオロゴス朝（1261-1453）に開花した「パライオロゴス朝ルネサンス」の時期には、優れた文献学者の写生字たちが続いた。上掲した劇詩人たちの各々に関して、手写本の状況は少しずつ異なるものの、彼らフマニストたちのうち代表的な人物としては、マヌエル・モスコプロス（1265-1346 以降）、トマス・マギス

トロス（1275-1347以降）、デメトリオス・トリクリニオス（1280-1330以降）という「ビザンティン・フマニスト三星」の名が挙げられるだろう。彼らは特に、古典ギリシア語の語法・文法、あるいは韻律についての正確な知識を備え、それを手写本校訂・注解の際に駆使することによって、手写本の質の向上・改良に貢献した。

さて、本稿で展開しようとするのは、これら古典学に長じた写字生たちによる写本校訂の実際を跡づける作業ではない。文献学上の彼らの多大な功績については、これまでもトゥリン、オブルトン、ウィルソン、フンガー、イリグアン、あるいは個々の劇詩人の校訂家たち—マストロナルドやドー、ドーヴァーやサマステインといった人々—によって、ほぼその全容が解明されてきた。本稿も全面的に彼らの研究に負っている。ただ、いわゆる思想史ないし世界史上で迎えられる同時代のビザンティン世界の状況と、彼ら文献学者たちの活動とが相互の関連のうちに語られることは、これまでほとんどなかったと言えよう。

後に見るように、たとえば1353年から1355年にかけて、また1364年から1376年にかけてコンスタンティノポリスの総大司教を務めたフィロテオス・コッキノス（1300-1379頃）は、貧しかった幼年・青年期に、上掲したトマス・マギストロスの許で料理人として生活していたことが知られている。このことから推測されるように、トマス・マギストロスは、テオドロスという修道名を持つ修道士（モナコス）であった。トマスの師は上掲のマヌエル・モスコプロスであるが、モスコプロスにも神学関連の著作があり、マヌエルの師に当たるマキシモス・プラヌデス（1250-1310）も修道士であった。もとより古代末期以降、手写本の一大中心産出地が修道院であったことを考えれば、写字生たちの多くが修道院的環境と密接な関係を保ちながら生活したであろうことは想像に難くない。そして筆者の学生時代に、ヴェルナー・イエーガー教授（1888-1961）の思い出を綴られる中で、このことを間接的な形で示唆して下さったのが久保正彰教授であった（久保1982:94）。

1. 諸写本における作品の配列順—ヴェネツィア・サンマルコ修道院図書館所蔵本を例に—

これら「ビザンティン三部作」の写本状況に関しては、上記のように個々の劇詩人に関して少しずつ状況が異なっている。ここでは、枢機卿ベッサリオン（1403–72）が収集寄贈したヴェネツィアのサン・マルコ修道院図書館所蔵写本を例に、劇詩人たちの写本の実際について、その次第を概観することにしてしよう。

サン・マルコ修道院図書館所蔵写本群は、東西教会合同のために開催されたフェッラーラ・フィレンツェ公会議（1438–39）において、ビザンティン教会の代表者たちから教会合同のための合意を取り付けたものの、後にこの議決について彼らから全面的な反発を買い、西方教会に転じて後に枢機卿に挙げられたギリシアの修道士ベッサリオンが、1468年に寄贈した写本類を中核としている。現在 Venetus Marcianus として記載されるものがそれであり、そのナンバリングに関して変遷はあったものの、ギリシア韻文文学関係の写本類は、旧来の番号に従えばほぼ 450 番台以降に見られる。本稿とは直接関係しないが、特に著名なものとしては Venetus Marcianus 454 があり、これはホメロス『イリアス』の写本 A として知られる。以降、Venetus 464 にヘシオドスの写本が見られるのに続き、劇詩人たちの作品を収めた写本は、筆者の調べた限りでは Venetus Marcianus（以下 VM と略す）467 から始まる。以下主なものに限って、それらに収められる内容を見てみよう。データは各劇詩人たちのテキストに付される写本一覧欄、ないし主としてトゥリンの研究による部分が多い。

まず VM467 はソフォクレスの写本としては U と略され、14 ないし 15 世紀（初頭）の成立とされる。作品の配列は『アイアス』『エレクトラ』『オイディプス王』『アンティゴネ』『コロノスのオイディプス』『トラキスの女たち』『フィロクテテス』であり、冒頭 3 作は「ビザンティン三部作」の順序に等しい。

次に VM468 は、アイスキュロスで V、ソフォクレスで V（ドー）、エウリピデスで F とされるものであり、新しい研究では 1270 年頃の成立とされる。ソフォクレスの順序は『アイアス』『アンティゴネ』『フィロクテテス』『エレクトラ』『オイディプス王』『トラキスの女たち』『コロノスのオイディプス』であり、ビザンティン三部作の 3 作が順に連なって収められているわけではない。エウリピデスについては『ヘカベ』『オレステス』『フェニキアの女たち』に続いて『メデア』1-41 を収める。

VM469 は、1413 年 1 月 10 日にヒエロモナコス・ステファノスにより筆記完了されたものである (169v)。「ヒエロモナコス」とは、修道士たちが集う修道院において典礼上不可欠な役割を負う司祭として、一定数叙階された者を指し、数十人の修道士に対して数人の司祭が標準の割合だとされる (Kazdhan 1991: 930)。この写本は 6r より『ヘカベ』本文、52r より『オレステス』、111r より『フェニキアの女たち』が収められている。典型的な「ビザンティン三部作」タイプのエウリピデス写本であり、15 世紀に入ってから「ビザンティン三部作」が流行した次第がわかる。なおエウリピデスの「ビザンティン三部作」に含まれる個々の作品の写本数は、『ヘカベ』が 200、『オレステス』が 180、『フェニキアの女たち』が 130 ほどである (Battezzato 2018: 23)。

VM470 は、アイスキュロスで Va、ソフォクレスで Ta、エウリピデスで N と称される 15 世紀の写本であり、トゥリンによれば 1465 年頃の成立とされる。クレタ島のアレーテール（司祭）ゲオルギオスの筆記になるもので、ゲオルギオスはベッサリオンに用いられた写字生であった (Turyn 1949: 159)。1v より『ヘカベ』本文、19r より『オレステス』本文、41v より『フェニキアの女たち』、64v より『アンドロマケ』、81r より『ヒッポリュトス』、100r より『メデア』の 1-730; 825-1028; 1134-1338 行が載る。マヌエル・モスコプロスのスコリア（欄外注）や、デメトリウス・トリクリニオスの注記を含み、ゲオルギオスはおそらく、トリクリニオスの直筆からこれを写したと思われる。15 世紀後半に「ビザンティン三部作」を超えて関心が拡大する次第を推察することができるが、それらについてはひとまず本稿の射程外で

ある。

VM471 はエウリピデスの M 写本である（キルヒホフでは A）。12 世紀の成立とされるが、新しいバツテッサートの研究によれば 11 世紀（マストロナルドの HP : euripidesscholia.org/EurSchHome.html）によれば 1000–1050 年頃）のものとしてされる。スコリア付きのディオニュシオス『周遊記』に続き、20r より『ヘカベ』、44r より『オレステス』本文、76v より『フェニキアの女たち』本文、109v より『アンドロマケ』本文、133v より『ヒポリュトス』（本文 1–1234）が続く。ヴィラモヴィッツは『アルケステス』がこの M に入っていて消されたものと推測する（Labowsky 1979 : fn.135）。

VM472 は、ソフォクレスの OCT 旧版では 14 世紀のものとしてされており、オブルトンによれば V4 とされ、またアリストファネスの V2 に該当する（Sommerstein 2001 : 35）。ソフォクレスについては『アイアス』『エレクトラ』『オイディプス王』『アンティゴネ』を収め、この順で初めから 3 作分について写すなら「ビザンティン三部作」に一致する。

VM473 は、アリストファネスの V3（Sommerstein 1999 : 7）で、14 世紀のものである。

VM474 はアリストファネスの良質写本（V）として知られる（11/12 世紀）。順序は『騎士』『福の神』『鳥』（1419 まで）『蜂』（421–1397、1494 以降を除く）『平和』（377–1298 を除く）『蛙』『雲』であり、これら計 7 作品を収めている。この写本はアリストファネスの「ビザンティン三部作」を収めるものの、それ以外の作品を間に含み、順序にも逆転が見られる。

VM475 はサマステインによる G（Sommerstein 1996 : 32）で、15 世紀のものである。

そのほか番号は飛ぶが、VM616 はアイスキュロスの G、ソフォクレスの Zr（ドー）で、オブルトンは V2 とする。15 世紀の成立とする説と、1321–22 年の成立とする説の二つがある。ソフォクレスの作品が 1–82v に収められ、その順序は『アイアス』『エレクトラ』『オイディプス王』『アンティゴネ』『コロノスのオイディプス』『トラキニアイ』『フィロクテテス』である（Turyn 1949 : 171）。したがってこれは VM467 と同じ配列であり、冒頭に

「ビザンティン三部作」が収められている。次いでアイスキュロスの作品が 82v-122v に記されていて、『プロメテウス』が 83v-92r、『テバイ攻めの七将』が 92v-100v、『ペルサイ』が 101r-109r に収められ、続いて『アガメムノン』の 1-45、1095-1673、そして『エウメニデス』の 1-581、645-777、808-末尾までが収録されている。アイスキュロスの部分についても、冒頭より順に「ビザンティン三部作」を取めてはいるが、3作に限定するタイプではない。

2. 他の写本類との比較検討

さて「ビザンティン三部作」という選集をめぐることは、4名の劇詩人の作品計 12作が各々、

- 1) なぜそれぞれこの順序に並べられているのか。
- 2) なぜ一貫して「3」という数で選ばれたのか。
- 3) なぜ特にこれらの作品が選出されたのか、

といった点に主たる関心が向けられるであろう。

3) に関しては、先に考察を始めた。エウリピデスの選集にあっては、すでに古代末期の時点ですでにこの順序が（すべての写本に関してではないにせよ）定まっていた。したがってフマニストたちが、既存手写本での作品順を踏襲してその順序には変化を加えず（1）、作品群の冒頭から3作ずつを選んで（2）筆写を進めた、という経緯を想定できようから、本稿での考察は、結局のところ（2）に関するものに絞られる。そこでまず、他の劇詩人について VM 以外の有力写本を勘案しつつ、順序の異なるものを考え併せてみたい。

ソフォクレスに関しては、ヴェネツィア本内部にあっても、VM468 では「ビザンティン三部作」と異なる順序が認められた（後に詳述）。またアイスキュロスについては、現存写本の中で最良のものとして、M（メディケウス；11世紀）が挙げられるが、M にあって、7編の順序は『ペルサイ』『アガメムノン』『コエフォロイ』『プロメテウス』『エウメニデス』『テバイ攻めの七

将』『ヒケティデス』である。なおこの M は第 18 四つ折りと第 19 の 6 葉が失われていて、そのため『アガメムノン』の 311-1066 と 1160-1673 (結行)、および『コエフォロイ』の梗概とプロロゴスの部分が欠けている。その部分の補完は、F (ラウレンティアヌス 31.8)、上掲の G (VM616)、および Tr (ネアポリタヌス IIF31) から可能である。先に少しく触れたように、「ビザンティン三部作」の順序で 3 作を収めるタイプのものは Φ と総称されるが (Hunger 1961 : 274)、この Φ と M とはステンマ上の場所を異にする。アーキタイプ本 ω から Φ と M とが分岐し、 Φ の段階に移行する時点で「ビザンティン三部作」への集約が行われたと言える。この選択、すなわち「ビザンティン三部作」への収斂は、11 世紀から 12 世紀の間になされたと考えられ、13~14 世紀の学者たちの関心は、ほぼこれら「三部作」に対するもの限定されることとなった (Griffith 1983 : 36)。

アイスキュロスのこの M 写本と同じ写本に、続いてソフォクレスの作品 7 編が含まれていて、こちらは L の略称で示される (ラウレンティアヌス 32,9; したがって同じく 11 世紀成立)。ソフォクレス作品集 (L) における著作 7 編の収録順序は『アイアス』『エレクトラ』『オイディプス王』『アンティゴネ』『トラキスの女たち』『フィロクテテス』『コロノスのオイディプス』である。このうち冒頭の 3 作は、「ビザンティン三部作」の順序と合致している。一方、上掲したヴェネツィアの VM468 (“V”; 13 世紀) にあっては、「ビザンティン三部作」の 3 作が順に連なって収められてはいない。またフィレンツェの写本 G (conv. soppr. 152, 1282 年) にあっては、記載収録の順序が『アイアス』『オイディプス王』『エレクトラ』『フィロクテテス』であることが知られている (Turyrn 1944 : 17)。これに対し、1290 年頃と想定されるモスコプロス由来の最古の版は、『アイアス』『エレクトラ』『オイディプス王』の 3 作に限定されていて (Hunger 1961 : 275)、この点についてはトゥリンも指摘している (Turyrn 1949 : 95)。つまりソフォクレスの写本に関しては、作品の配列順に 2 系統があり、ヴェネツィア所蔵本の中でも VM467・616 と VM468 とで不一致が認められる。VM468 は 1270 年頃の成立と考えられ、また上で触れた G 写本 (1282 年成立) も記載順序が異なっ

ている。フマニストたちの活動は、アンドロニコス 2 世パライオロゴス帝（在位 1282–1328）の治世下、ほぼ 1290 年前後以降にその全盛期を迎えたと思われる。その際にこれら異順序の写本類の収録順が継承されず、「ビザンティン三部作」の作品と掲載順に向けた収斂が行われていることから、やはりアンドロニコス帝の治世下に、フマニストたちにより「三部作」への固定化が進んだということが確認されよう。

ちなみにアイスキュロスは、原作の段階でいわゆる「三部作」（「ビザンティン三部作」とは根本的に意味が異なる）構成を採ったことで知られる。これは、前 458 年に上演された「オレスティア」三部作（「アガメムノン」「供養する女たち」「恵みの女神たち」）が 3 作すべて現存するために知られることであるが、以下「ビザンティン三部作」について、その（原作における）「三部作」の構成を記すなら次のようになる。現存作品には下線を付し、三部作の後に上演されたサテュロス劇も付記しておく。なお現存する残り 1 作、すなわち「救いを求める女たち」は、三部作構成では第 1 作に当たっていたことが知られている。

1. 「フィネウス」「ペルシア人」「ポトニアイのグラウコス」；サ「火を灯すプロメテウス」 472 年。
2. 「ライオス」「オイディプス」「テバイ攻めの7将」；サ「スフィンクス」 467 年。
3. 「縛られたプロメテウス」「解放されるプロメテウス」「火を齎すプロメテウス」；サ不明 年代不明。

一方、いわゆる「ビザンティン三部作」にあって、第 1 作は『縛られたプロメテウス』であるが、第 2 作は『テバイ攻めの七将』、第 3 作は『ペルシア人』であるから、「ビザンティン三部作」が、原作における三部作構造を顧慮して組み立てられたものでないことは明らかである。

次に、エウリピデスの L 写本（ラウレンティアヌス 32.2、14 世紀）は、収録順に並べるなら『救いを求める女たち』『バッカイ』『キュクロプス』『ヘラクレスの末裔たち』『ヘラクレス』『ヘレネ』『レスス』『イオン』『タウリケのイフィゲネイア』『アウリスのイフィゲネイア』『ヒッポリュトス』『メデ

ア』『アルケステイス』『アンドロマケ』『エレクトラ』『ヘカベ』『オレステス』『フェニキアの女たち』となり、『トロイアの女たち』および『バックイ』756 以下を除いてすべての現存エウリピデス作品を含んでいる。このうち、唯一L 写本により伝わっている作品は、『ヘレネ』（頭文字 E）『エレクトラ』『ヘラクレスの末裔たち』『ヘラクレス』（同 H）『ヒケティデス』『アウリスのイフィゲネイア』『タウリケのイフィゲネイア』『イオン』（同 I）『キュクロプス』（同 K）の 9 作である。これらには注釈が施されていない。他の 10 作は、紀元後 250 年頃までに支配的になったもので、『ヘカベ』『オレステス』『フェニキアの女たち』『ヒッポリュトス』『メデア』『アンドロマケ』『アルケステイス』『レスス』『トロイアの女たち』そして『バックイ』である（Allan 2008 : 84）。この点については、本稿冒頭に引いたメリディエも同趣旨の見解を表明していた。エウリピデスの「ビザンティン三部作」は、この 10 作分について、冒頭 3 作をこの順序で選択したものであることが知られる。その他、11-12 世紀の作である上掲 VM471 (M)、13 世紀の作であるパリジヌス 2712 (A)、13 世紀の作であるヴァティカヌス 909 (V)、13 世紀の作であるパリジヌス 2713 (B) は、各々、いずれもその冒頭に『ヘカベ』『オレステス』『フェニキアの女たち』をこの順に収めつつも、収録しているエウリピデスの作品群には相違がある（3 作の後に、M は『アンドロマケ』『ヒッポリュトス』を、A は『アンドロマケ』『メデア』『ヒッポリュトス』を、V は『メデア』『ヒッポリュトス』『アルケステイス』『アンドロマケ』『トロイアの女たち』『レスス』を、B は『ヒッポリュトス』『メデア』『アルケステイス』『アンドロマケ』をこの順に伴う。部分的な収録のケースも見られる）。総括すると、古代末期以来、「ビザンティン三部作」の順序そのものは確立しているものの、この 3 作だけを取り出す傾向は、やはりフマニストたちの活動の時期以降、すなわち 1290 年前後以降に置かれると言えよう。

そしてアリストファネスであるが、良質写本としてはラヴェンナ本 429 (R) があり、これは 10 世紀に遡る。その中でのアリストファネス作品の順序は『福の神』『雲』『蛙』『騎士』『アカルナイの人々』『蜂』『平和』『鳥』『テスモフォリアズサイ（女の祭）』『エクレシアズサイ（女の議会）』『リュシ

ストラテ（女の平和）』である（Hall 1968:205）。一方、前節に挙げたヴェネツィア所蔵の VM474 もアリストファネスの 7 作を収める良質写本（V）として知られ、11/12 世紀の成立であるが、こちらの順序は『騎士』『福の神』『鳥』（1419 まで）『蜂』（421-1397、1494 以降を除く）『平和』（377-1298 を除く）『蛙』『雲』である。これは「ビザンティン三部作」を収めるものの、順序も逆転している。ただその成立は 11/12 世紀に遡るため、「三部作」についてはこの順序が踏襲されなかったということが判明する。

以上、4 人の劇詩人に関しては、おそらく 1280 年代後半から 90 年頃にかけて、作品選択・筆写収録の順序の上で「ビザンティン三部作」への収斂が確立したものと考えられる。

3. ビザンティンのフマニストたち

では、本稿で「ビザンティンのフマニストたち」と総称される人々について、各フマニストの履歴を簡単に概観しておきたい。マクシモス・プラヌデスについては後述することとする。まずマヌエル・モスコプロス（1265-1315）はマクシモス・プラヌデスの弟子である。彼は注釈家にして文法家であり、『イリアス』、ヘシオドス、テオクリトス、ピンダロスほかのスコリアの著者である。『文法質疑集』が主著であり、著作『アッティカ語彙集』も広く普及し、数学、神学にも通じていた。神学書として彼の名が遺る『ラテン神学者駁論』は、頑強な合同推進派のゲオルギオス・メトキテス（1327 没）によって反駁されるという栄誉に浴した。彼の文法論文は、マヌエル・クリュソロラス、ガザのテオドロス、グアリーニ、コンスタンティノス・ラスカリスのような古典学者たちの仕事の基礎となった。なおマヌエル・モスコプロスは 1305 ないし 1306 年に投獄されたとき、これはおそらく政治的な事件に巻き込まれたのが理由かと思われる（Ševčenko 1952）。

次に、トマス・マグストロス（1270-1325）もモスコプロスと同様、マクシモス・プラヌデスの弟子であった（Hunger 1961:273）。トマスの修道名はテオドロス・モナコス、テッサロニケの生まれである。トマスの弟子には、

フィロテオス・コッキノス（後に詳述）、次に挙げるデメトリオス・トリクリニオス、グレゴリオス・アキンデュノスらがいる。文献学者かつ文法家で、アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス、それにアリストファネスの作品についてのスコリアを記している。1314年から1318年の間、皇帝への使節としてテッサロニケからコンスタンティノポリスに赴いたこともあり、アンドロニコス2世帝（前出、在位1282-1328）の良きアドバイザーであった。『アッティカの名詞動詞撰集』が主著とされる。1300年頃には、アリストファネスの写本校訂にも携わったと考えられる（Sommerstein 2001: 34）。

そしてデメトリオス・トリクリニオス（1280-1340）は、このトマス・マギストロスの弟子である（Hunger 1961: 273）。1280年頃テッサロニケに生まれ、古代ギリシアの多くのテキスト、特にアイスキュロス、ソフォクレス、そしてエウリピデスの詩行の韻律を分析かつ編纂した人物である。天文学の知識も持ち合わせていた。十分に整備されていなかった悲劇・喜劇のテキストに関して、韻律を勘案した校訂を準備したことが彼の最大の功績であり、アイスキュロスの5編の作品（『アガメムノン』『エウメニデス』を含み、直筆が残る）、ソフォクレスの現存7編すべて、アリストファネスの8編を校訂したほか、上述したような、エウリピデスの学校用でなかった作品、すなわち14世紀以前には知られることのなかったものを校訂した功績は大きい。マクシモス・プラヌデスの詞華集も校訂し（Kazdhan 1991: 2116）、1315年から1330年の間にはアリストファネスの写本校訂に携わったと考えられる（Sommerstein 2001: 34）。

4. マクシモス・プラヌデス

ところで、上掲したマヌエル・モスコプロスおよびトマス・マギストロスの師とされたマクシモス・プラヌデス（1250-1310）は、彼ら「ビザンティン・フアニストたち」の「父」とでも称すべき存在だと言える。そして本稿で注目したいのが、このプラヌデスが神学書として遺した一書『ケファライア』である。彼は『ギリシア詩歌選』の補巻とも言うべき *Anthologia Planudea*

の编者としても知られる。このように、プラヌデスは修道士、名詩撰家、ラテン語翻訳者、文法家そして神学者であり、ニコメディアの出身であるが、幼いころコンスタンティノポリスに上京し、1283年に修道士となった。ラテン語を知悉する立場から、当初皇帝ミカエル8世（在位1261-82）の教会合同運動のために尽力した。しかしミカエル8世が1282年に没し、合同反対派のアンドロニコス2世が帝位に就くと（在位1282-1328）、教会合同に反対する論文を著す。こうして遺されたのが『ケファライア』（「章」；当初3章、後に4章）である。この著作に対しては、合同推進派のメトキテス、あるいは下ってベッサリオンによる反駁書が遺されている。

プラヌデスは、アウグスティヌスの『三位一体論』ほか、ラテン系の神学書（およびオウィディウスの詩編など）をギリシア語に訳したという点で特筆すべき存在であるが、上述のように、アンドロニコス2世の即位（1282）に伴い、教会合同派から合同反対派へと変節している。これは新皇帝による投獄を恐れたためと考えられる。カルケドンの首府司教が、彼のためにアウクセンティオス山麓にある「5聖人の修道院」を提供したが（Wendel 1940: 407）、プラヌデスはコンスタンティノポリスに留まり、まずコラ修道院に、のち13世紀の末にはアカタレプトス修道院に移って質の高い教育を施し、1310年頃に没したと思われる。聖霊の発出をめぐる、ビザンティン教会の立場を表明した弁証法的な『ケファライア』を著したのが、教会合同を自ら率先して唱道し1274年の第2リヨン公会議において教会合同を決議させたミカエル8世の没後（1282）、すなわち合同反対派アンドロニコス2世帝の即位後であったことは間違いがない。ベッサリオンによる同書の反駁書のうちに、プラヌデス自身の原テキストが引用されて遺っているため、次節でこれを適宜拙訳し考察する（PG161, 309-318）。同じテーマに関するさらに広範なプラヌデスの論文『信仰についての書』は未公開であるが、彼はこの他、使徒に関する讃辞、教父たちの抜粋書、典礼讃歌なども遺している。

なお久保正彰教授は、ヤコブス・ホイエルの研究に先立ち、しばらく「サッフォーの書簡」をめぐる研究を進めておられたが、その中でプラヌデスに言及しておられる（久保1986:2）。

5. プラヌデスの『ケファライア』

ではマクシモス・プラヌデスが著した『ケファライア』のテキストに即して考えてみよう。第2版とも言うべき全4章構成のものを参照することにし、そのうち第2章と第3章については要約で済ませ、第1章については前半部のみ訳出することにする。本稿で注目したいのは特に第4章である。

1) 「問われるべきは、聖霊の発出が父からと子からとで、それぞれ異なるものであるのか、あるいは一にして同じであるのか、という問題である。もしそれぞれ異なるものであるとすれば、発出は二通りのものとなり、その結果、聖霊は二通りのものとなるであろう。これは当たらない。しかるに一にして同じであるとすれば、一であるということが、いかにして非質料的な二者から可能なのであろうか。というのも一者は、二者の始原であり原因であるばかりでなく、他のすべての数の始原かつ原因だからである。しかるに二者が、一者のもしくは一の始原また原因となることはあり得ない」(以下略)。

2) 子と聖霊がともに父に由来するなら、両者は父とも同一本性である。聖霊が子からも発出するなら、霊の同一性が保証されない。

3) 聖書にない「同質な」という言葉を、聖師父たちはなぜ使徒信条に加えたのか。それは、そうしないと子が父よりも小さいと考えられる恐れがあるためである。

4) 「諸存在のすべてにおいて三位は看取される。というのも、視覚に入るものの何であれ、それらはすべて、たとえ他の範疇を排除したにせよ、本質と量と質は有することになる。ここで量ないし質と言っているのは、それが有する重さ、および色のことである。それらのものが本質のうちに存立を有するのと同様に、子および聖霊もまた、父からその存立を得ている。ちょうど言ってみれば、黄金の本質、そして質ないし色は、黄金である限りにおいて、不変なままに留まる。しかるに量ゆえの形状は、同じ重さを維持したまま、あるものから別のものへと変化する。それとちょうど同じように、父と

聖霊とは、外界のいかなるものにも与かることがないが、子は人間の本性を加えて受け取っていながら、なお同じ本質のうちに留まっている。この点に関してラテン人たちは、聖霊の発出に関して躓きのない教義を立てていないために論駁される。なぜなら、色は本質と形状に関わることはなく、視覚のみに関わる。それと同様に、聖霊もまた、父と子からではなく、父のみから発出すると語られるのである。色は視覚のみに関わる。なぜなら視覚だけが色を識別するからである。しかるに形状は視覚と手触りとに関わる。それらの双方によって把握されるからである。しかしながら、本質は手触りのみに関わるであろう。

上の一節でキー・フレーズとなるのが第4章冒頭の「諸存在のすべてにおいて三位は看取される」というプラヌデスの句である。先に見たように、プラヌデスは1283年、修道士になっている。これは教会合同派皇帝マヌエル8世が没し、合同反対派のアンドロニコス2世が即位した翌年である。教会合同派の修道院というものは、この当時は事実上存在しなかった（詳細については秋山2010を参照）。たとえばミカエル8世を助けた教会合同派の大助祭（archidiaconus）ゲオルギオス・メトキテスには、5人の子があったということから、メトキテスが修道士ではなく、在俗助祭であったことは確実である。したがってプラヌデスの修道誓願は、これを機に教会合同派から合同反対派に転じるという意思表示であったに相違なく、合同反対の意向が顕著な『ケファライア』は、この1283年以降に記されたと考えてよい。プラヌデスは、この1283年には30歳前半であり、以降ほぼ4半世紀以上にわたって合同反対の立場を取ったと思われる。

プラヌデスの弟子として名の挙がるのは、トマス・マギストロスおよびマヌエル・モスコプロスの二人である。トマスは修道士であったが、マヌエルが著した神学書『ラテン神学者駁論』（*Διάλεκτις πρὸς Λατίνους*）についても、先に触れた大助祭ゲオルギオス・メトキテスによる論駁書が遺されている。メトキテスはアンドロニコス帝の即位（1282）以降、45年間にわたり、その教会合同の立場ゆえ獄につながれる。マヌエルの『ラテン神学者駁論』は、ミーニュ版を含めていまだに校訂版が出版されていない（手書き本は Bodl.

Barocc. 68 および Parisinus 969; Beck 1959: 681)。ただその主張は、他のギリシア系修道士による著作の主旨と同じく、「聖霊は子からも発出する」とするラテン神学者たちを反駁するものであったに相違ない。

6. 聖霊をめぐるビザンティン教会の立場

さて、ビザンティン典礼教会とローマ典礼教会とは、形式上は 1054 年に決定的に分裂したとされる（近世以降における双方の和解については本稿の射程外である）。だがそれ以降、ビザンティン帝国が、迫り来るイスラム勢力の猛威の下で西方世界に援助を求め、時に、ビザンティン教会の神学上の立場を曲げてでも教会合同を実現させようとする者が一部に存在したのは確かである。その一人として名の挙がるのが、上掲したミカエル 8 世であり、彼は皇帝として自ら第 2 リヨン公会議（1274）に赴き、教会合同のための調印を行った。ミカエル 8 世の存命中には、彼の臣下が合同推進派で固められていたことは確かで、前述のメトキテスや、コンスタンティノポリスの総大司教を務めたヨアンネス 11 世ベッコス（1225-1297；在位 1275-1282）らがその代表的な人物であった。約 150 年後には、本稿冒頭でも触れたように、教会合同派のベッサリオンが奔走するフェッラーラ・フィレンツェ公会議（1438-1439）が開催されることになる。

これら教会合同を模索する動きの中で、必ず問題点とされたのが「聖霊の発出」をめぐる信仰箇条の文言であった。325 年と 381 年の公会議において決議されたニケア・コンスタンティノポリス信条のギリシア語原文には「われわれは聖霊を信ずる。聖霊は主にして生命の創り主である。聖霊は父より発出し、父とともにまた子とともに、礼拝され栄光を受け、預言者たちを通じて語る」と明記されている。ここには「聖霊は預言者たちを通じて語る」とあることにも注意したい。ところがラテン語を使用する西方世界のローマ典礼教会では、次第に、この信仰箇条の中の「聖霊は父より発出し」に、「Filioque」つまり「子からも」（聖霊は発出する）という句を挿入して理解するようになった。その明確な表明はおそらく、589 年に開催された第 3 回ト

レド教会会議での「レカレド1世の信仰告白」における「子からも」条項を起源とすると思われる（DS 1965:§470）。以降、9世紀のフォティオス問題や、1054年前後、あるいは第2リヨン公会議における折衝、そしてフェッラーラ・フィレンツェ公会議といった際には必ず、ビザンティン教会側には総じて、西方ローマ典礼教会によるギリシア語原文の理解の不十分さに対する、もどかしさと不満とが、鬱積することになったと言える。このニケア・コンスタンティノポリス信条には手を加えないことが大前提であり、「子」は神性の一位格（ペルソナ）として、聖霊の発出に際し「父より子を通して発出する」というかたちで参与する、とするのがビザンティン教会の一般的な理解であった。

7. 第2リヨン公会議（1274）

1274年に開催された第2リヨン公会議は、その決議事項に関して、後のフェッラーラ・フィレンツェ公会議（1438-39）とほぼ同質であり、西方側の主張を盛り込んだものとなった。第2部会決議（DS 1965:§850）「1274年5月18日：聖霊の発出について」を参照しよう。

「われわれは信篤く敬虔なる告白をもって次のことを告白する。聖霊は永遠に、父と子より、あたかも二つの原理からのようではなく、むしろ一つの原理からのように、また二つの息吹としてではなく、むしろ一つの息吹として発出する。このことを、いとも聖なるローマ教会、すべての信篤き者たちの母にして師である教会は、今日まで告白してきたし、公けにして教えてきた。また今日、このことを確かに守り、公けにして告白し、教える。そしてこのことを、正統教会の師父たちと教会博士たちの不変にして真なる見解は、ラテン人・ギリシア人を問わず、表明している。しかしながら少なからぬ人々は、表明された反駁しえぬ真理に対する無知ゆえに、様々な誤謬に陥った。そのためわれわれは、この種の誤謬に対して道を閉ざすことを欲し、聖なる公会議の同意を得て、聖霊が永遠に父と子より発出するということを敢えて否定しようとする者どもを、断罪し非難する。彼らが、無謀な試

みにより、聖霊が父と子から、あたかも一つの原理からではなく、二つの原理から発出するということを主張するにしても、これは同様である」。

こうして形式上は、公会議において「父と子よりの聖霊の発出」が決議されたのであるが、4世紀の信仰箇条の制定以降、「父よりの聖霊の発出」を継承してきたビザンティン教会の聖職者たちにとって、この「フィリオクエ」の条項は、譲歩することもいわんや受諾することもできない、大きな誤謬なのであった。

マクシモス・プラヌデスは、先に訳出した『ケファライア』の第1章において、さまざまに論を尽くして「聖霊の父と子よりの発出」の論理的誤謬性を示そうとしている。そこには当然、アリストテレス的な論理学を駆使してのプラヌデス一流のテクニックも指摘できよう。ただ本稿では、ビザンティン典礼教会とローマ典礼教会に明確な形で表れた典礼暦上の事項を根拠に、次節において東西教会の根本的なスタンスの相違を指摘することにした。

8. 「旧約」の人々の位置

本稿で注目したいのは、ビザンティン典礼教会で用いられている『メノロギオン』と呼ばれる典礼カレンダーにおける「聖人」の扱いと、ローマ典礼教会暦上におけるそれとの相違である。前者すなわち『メノロギオン』には、1年間366日のそれぞれの日々に、教会の典礼において記憶・追憶・記念される聖人が、簡潔な評伝とともに記載指示されている。もちろん、後者すなわちローマ典礼教会にも典礼カレンダーは存在し、両者に共通する記念日・祝日も多い。だが最も大きな相違点として映るのは、旧約聖書に登場する諸人物たちに関する両典礼暦での扱いである。『メノロギオン』では、旧約に登場する族長や預言者たちがいずれも「聖人」の位を与えられ、典礼暦上に各々の記念日を有している。以下にそれらを挙げることにしよう。アブラハム：10月9日（以下、いずれもグレゴリウス暦によるギリシア・カトリック教会での日付; cf. 秋山 2007）、モーセ：9月4日、ヨシヤ：9月1日、サムエル：8月18日、エリヤ：7月20日、エリヤ：6月14日、ヨ

ブ：5月6日、イザヤ：5月9日、エレミヤ：5月1日、バルク：9月28日、エゼキエル：7月23日、ダニエル：12月17日、ホセア：10月17日、ヨエル：10月19日、アモス：6月15日、オバデア：11月19日、ヨナ：9月21日、ミカ：1月5日；8月14日、ナホム：12月1日、ハバクク：12月2日、ゼファニア：12月3日、ハガイ：12月16日、ゼカリヤ：2月8日、マラキ：1月3日、マカベウス家の殉教者たち：8月1日。

これに対してローマ典礼教会では、旧約の人々は「義人」という扱いを受け、彼らは「聖人」ではない。この点での両者の差をめぐっては、たとえばダンテ（1265-1321）の『神曲』「地獄篇」（第4歌52-63）において、冥界下りをする途上のダンテに対し、ウェルギリウスが、「自分がリンボに着いて間もない頃、キリストが下って来て、アダムやモーセ、アブラハムやダビデらリンボの住人であった旧約の人物を連れ、自ら復活するとともに昇天した」と述べる。この説明は、この「義人」との関連で想起されよう。東西の神学理解をめぐるダンテの位置については、彼がトマス・アクィナス（1225-1274）とは異なり、第2リヨン公会議の決議に通じていることから、別途検討が必要である（秋山2018）。ただともかく、ビザンティン教会の理解では「聖霊は父より発出する」がゆえに、旧約の預言者たちは、キリストがまだ到来していない時期の人々であるとはいえ、「聖霊を帯びて語った」、つまり「聖人である」とすべきなのである。

例を引いて考察を続けよう。『ヨハネ福音書』7：37-39は、イエスが「わたしを信ずる者は、聖書に記されている通り、その人の内から活ける水の河が流れ出すであろう」と述べる箇所であるが、この箇所をめぐる福音記者は「このときイエスはまだ栄光を受けていなかったのも、霊はまだ存在していなかった」と注記している。旧約聖書の預言者たちに関しても、彼らの時代（旧約の時期）にはまだ聖霊は存在しておらず、それは「父」なる神の時代である。イエスの十字架刑とともに聖霊が到来するわけであるが（ヨハネ19：34）、その到来の時点で旧約の預言者たちも「聖霊を帯びて語った」という終末論的・時間超越的な照らしが成立するため、旧約の預言者たちは、聖霊を帯びて語った「聖人」なのだ、とするのがビザンティン教会の理解で

ある。つまりビザンティン典礼教会における信条「聖霊は父より発する」とは、終末における聖霊発出をめぐる説明なのであって（1コリント 15:28）、新約聖書の随所に歴史上のイエス自身による聖霊の授与が記されているようにも（ヨハネ 20:22）、世には終末における救済と、超時間的な聖霊の働きとが既に実現しているのであるから、いわゆる「史的イエス」と終末論神学との間には、何ら齟齬は生じないのである。

9. グレゴリオス・パラマス

先にマクシモス・プラヌデスは『ケファライア』の第4章において「諸存在のすべてにおいて三位は看取される」と記していた。前節で見たように、ビザンティン教会固有の神学の観点からすれば、確かにイエスの十字架刑と共に聖霊がこの世に到来するのではあるが、その到来とともに聖霊は時間を超え、旧約の預言者たちさえも、すでに「聖霊が語るための具」と化した存在であったと言える。時間的側面ばかりでなく、空間的側面その他すべてを通じ、「諸存在のすべてにおいて三位が看取される」、すなわちキリスト到来以前の諸存在のうちに、聖霊の働きを読み取ることが可能である。またそのような可能性が拓かれたのは、キリストすなわち子の到来なくしてではあり得なかったのであるから、子の参与はここに実現している。すなわち、キリスト到来以前の「異教」文学の手写本のうちにも聖霊は働いている。このことをより具体的な「かたち」として示し、その「かたち」を通じてビザンティン典礼教会固有の神学的「三位」解釈を実証するために、1274年の第2リヨン公会議以降、そして1282年における合同推進派皇帝ミカエル8世の没後、合同反対派のアンドロニコス2世の即位と共に、ビザンティン・フマニストたちによる主導で「ビザンティン三部作」の量産が本格的に始まったとは考えられないだろうか。

本稿は、「ビザンティン三部作」成立の背後に、以上のような時代背景を読み取ろうとする試みであるが、この際、まず何よりも「3」という形式的な外観を呈することが不可欠であるということが理解されよう。同時代の他

の文献から、このような形式的側面に関する傍証は得られるだろうか。

ところで、ビザンティン教会における上述のような聖霊理解の神学的展開とあわせ、同じく 13 世紀から 14 世紀のビザンティン世界に多大な影響を及ぼした思潮に「ヘシュカスム」（静寂主義）がある。この思潮は、最終的に 1368 年、静寂主義者のグレゴリオス・パラマス（1296–1359）がビザンティン教会における聖人の位を与えられるという事態をもって、静寂主義の勝利という結果に終わる。パラマスは 1359 年 11 月 14 日に没しているが、このパラマスの列聖式を執り行ったのが、本稿冒頭でも触れたフィロテオス・コッキノスであった。このフィロテオスは 1353 年から 1355 年にかけて、また 1364 年から 1376 年にかけてコンスタンティノポリスの総大司教を務めているが、その在任期間中 1368 年に、四旬節第 2 日曜日をグレゴリオスのための記念日とした。このプロセスが「列聖」と呼ばれるものであるが、それは、聖人であれば固有の典礼文が設けられるのが習慣であり、この四旬節第 2 主日にフィロテオス自身がこの日のための典礼文を作詞披露したことが、パラマスの「列聖」に当たると理解できるためである。この日は、四旬節第 1 主日が「聖画像破壊論者たちに対する正統教義勝利の日」であるのに続き、その 1 週間後の日に当たる。

このグレゴリオス・パラマスの主著『聖なるヘシュカストたちのための弁護』（Meyendorff 1959）は三部作構成のもとに記述されており、全体が「三部作」（トリアス）という名で呼ばれることもある。もっとも、この著作における三部の各々が、それぞれ父・子・聖霊に関する論考に充てられているというわけではない。むしろ論敵バルラームの誤謬を駁し、ヘシュカスムの正統性を実証するために、教父たちに典拠を求め、あるいはバルラームを攻撃する、といったかたちで自由にパラマスが自らの思索と観想を迸らせている感のある著作である。むしろそれだけに、ビザンティン・フマニストたちの「三部作」写本筆写作成という営為と比較してみると、時代の傾向・風潮として、ビザンティン教会の正統性に拠って立つことを表明する際に「3」という形式が好んで用いられたという可能性を指摘することができるのではないだろうか。

10. フィロテオス・コッキノスへ

先述したフィロテオスは、グレゴリオス・パラマスを列聖したことで記憶されるばかりでなく、もう一つの偉業によって教会史上に名を遺すことになる。彼は先述のようにトマス・マギストロスの許で青年期を過ごした後アトス山に入り、アトス山ラヴラ修道院の掌院（ヘグメノス；院長）となるが、その後 1347 年にヘラクレアの司教となり（-1353）、さらに二度にわたってコンスタンティノポリスの総大司教を務める（1353-1355；1364-1376）。この間、彼はラヴラ修道院の院長であった時期に『奉神礼規定』（PG154、745-766）および『聖体祭儀規定』を著している（Taft 1992:82）。前者すなわち「奉神礼」のうちには、2つの祈祷システムが含意されており、それは「晩課」及び「朝課」である。すると、フィロテオスは2種の著作を通じ、修道士たちが日々勤しむべき聖務として「晩課」「朝課」それに「聖体祭儀」という3種の次第を規定したということになる。「聖体祭儀」については、ローマ典礼によるミサが通常、イエスの「最後の晩餐」を記念する宴であると捉えられるのに対し、ビザンティン典礼による「聖体祭儀」とは、聖霊降臨を祈願する部分（エピクレーシス）の司祭による黙祷文から明らかなように（秋山 2010）、あくまでも終末の時点に立った天上的宴の実現である。それゆえビザンティン典礼教会では、奉納物がキリストの体と血に「聖変化」するのはエピクレーシスの時点であるという認識に立つ。この意味でもビザンティン典礼での聖霊は、終末時の完成態を背景にしており、三位の正統的理解は蔑ろにできない事柄なのである。

コッキノスによる祈祷次第は、静寂主義論争においてヘシュカストが勝利を取めたこともあり、それ以降、ビザンティン教会における典礼構造の基調となって今日にまで及んでいる。もとより、プラヌデスの『ケファライア』に三位論をめぐる端緒を得たであろう修道士たちの「ビザンティン三部作」筆写行為は、フマニストたちの精緻な文献学的校訂作業を伴うとともに、コッキノスによる日々の祈祷次第にも「三位」との関連を見出す機縁を

得たとは考えられないだろうか。14 世紀後半にかけて、その質は劣るにせよ「ビザンティン三部作」がさらに量産される背景に、筆者はこのような時代状況を読み取ってみたい。

結. 三位のかたどりとしての「ビザンティン三部作」

三悲劇詩人および喜劇詩人アリストファネスの作品に関して、いわゆる「ビザンティン三部作」を収めた写本が 14 世紀にその数を増すという現象をめぐる、古典学と神学のあいだを往復しつつ小論を記すことになった。ビザンティン典礼における一日の祈祷サイクルは、晩課より始まる。すなわち、晩課 ⇒ 朝課 ⇒ 聖体祭儀という祈祷システムを三部作構造と三位に準えるなら、晩課（父）、朝課（子）、聖体祭儀（聖霊）とひとまず理解できるだろう。アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスそしてアリストファネスの作品中から選出された各々の「ビザンティン三部作」に関して、各三部作内部での作品の順序は固定化されてゆく。そもそも、各劇作品の内容そのものが、晩課・朝課・聖体祭儀の性格に対応し得るのか、対応し得るとすればどのような解釈のもとに対応するのか、といった作品解釈に関わる問題に関して、本稿で踏み込むことはしなかった。ただ、もし本稿で進めてきた推論が何らかの蓋然性を得るとすれば、実際に写本筆写に携わっていた写字生たちの内面には、各々の作品をめぐる、各自に納得できる形で、古典文学解釈と神学理解双方にまたがる観想活動が展開されていたはずだ、というのが、筆者による現時点での推測である。

【参考文献】

- 秋山学 2007 「ビザンティン典礼暦から読む旧・新約聖書—古代学の源泉としての「メノロギオン」(1) —」『文藝言語研究 文藝篇』52, 1-38.
- 秋山学 2010 『ハンガリーのギリシア・カトリック教会—伝承と展望—』創文社.
- 秋山学 2018 「ダンテ『神曲』の神学的背景とその普遍性—「煉獄篇」を中心に—」『筑波大学地域研究』39, 71-90.
- W. Allan 2008 *Euripides: Helen*, Cambridge.

- R. Aubreton 1950 *Démétrius Triclinius et les recensions médiévales de Sophocle*, Paris.
- L. Battezzato 2018 *Euripides: Hecuba*, Cambridge.
- H.-G. Beck 1959 *Kirche und theologische Literatur im byzantinischen Reich*, München.
- R. D. Dawe (ed.) 1996 *Sophocles: Ajax, Electra, Oedipus Rex*, Teubner.
- H. Denzinger- A. Schönmetzer (DS) 1965 *Enchiridion Symbolorum Definitionum et Declarationum* 36.ed., Freiburg im Breisgau.
- F. W. Hall 1968 (repr.) *A Companion to Classical Texts*, Hildesheim.
- H. Hunger 1961 *Antikes und mittelalterliches Buch- und Schriftwesen : Überlieferungsgeschichte der antiken Literatur*, Zürich.
- A. P. Kazhdan (editor in chief) 1991 *The Oxford Dictionary of Byzantium (ODB)*, Oxford.
- 久保正彰 1982 「わがギリシア悲劇の恩師たち」『ユリイカ』1982/8月号（特集・ギリシア悲劇），93–99.
- 久保正彰 1986 「EX SAPPBUS POEMATIS—Politiani Annotationes の背景」『西洋古典学研究』34，1–25.
- L. Labowsky 1979 *Bessarion's Library and the Biblioteca Marciana*, Roma.
- L. Méridier (texte établi et traduit) 1956 (4e éd. rev. et corr.) *Le Cyclope; Alceste; Médée; Les Héraclides*, Paris.
- J. Meyendorff 1959 *Grégoire Palamas: Défense des saints hésychastes* (2 vols.), Louvain.
- I. Ševčenko 1952 “The Imprisonment of Manuel Moschopoulos in the Year 1305 or 1306”, in: *Speculum* 27–2, 133–157.
- A. H. Sommerstein 1996, 1999, 2001 *Aristophanes: Frogs, Clouds, Wealth*, Warminster.
- R. F. Taft 1992 *The Byzantine Rite: A Short History*, Collegeville.
- A. Turyn 1943 *The Manuscript Tradition of the Tragedies of Aeschylus*, New York.
- A. Turyn 1944 “The Manuscripts of Sophocles”, *Traditio* 2, 1–41.
- A. Turyn 1949 “The Sophocles Recension of Manuel Moschopoulos”, *Transactions and Proceedings of the American Philological Association* 80, 94–173.
- C. Wendel 1940 “Planudea”, *Byzantinische Zeitschrift* 40, 406–411.
- N. G. Wilson 1983 *Scholars of Byzantium*, London.